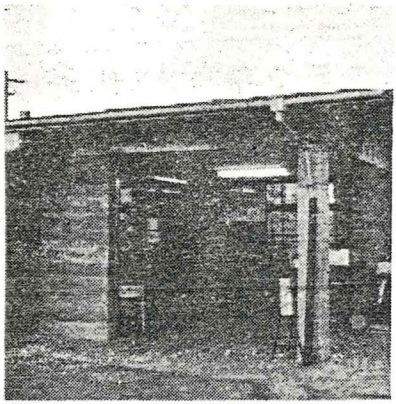
市史の窓 No.56

55



城陽という地名

前回は、淀県とか小泉県とか耳慣れない県名と、城陽との関係について書きました。それとのかかわりで、近代の地名についてよく知られているところもありますが、二・三紹介しましょう。

「城陽町」は、昭和二十六年四月に誕生しました。が、城陽という名称は、明治の頃にも使われています。広辞苑によりますと、「陽」は「日に向っている方」「山の南面の地、川の北岸の地」と説明されています。山陰に対して山陽のように、南の日に向った暖かい明るい山地ということで、山城の南の地方を城陽というのは、好地名というべきでしょう。

明治二十二年一月に「城陽中央同志会」が富野村の松屋で、約六十名の出席で結成された」と、日出新聞（戦前の京都の地方新聞）の記事にあります。この会がどういう会か、おそらく次に述べます、この時の町村合併に関連した集まりであったとも思われますが、城陽という名が会名に使われている訳です。降って明治四十三年に、「城陽酒類商同業組合」が設立されています。

ところで、明治二十一年四月公布の市制町村制によって、翌二十二年四月に、江戸時代以来の十一の村が合併して、久津川、寺田、富野荘、青谷の四カ村が成立します。久世、上津屋、平川三カ村が合併して成立した新村は、旧村名の一字ずつをとって久津川村としたのは、スムーズにいったと思われます。ところが、富野、枇杷庄、観音堂の三カ村で合併した新村では、村名問題で協議がまとまらないと、前記の日出新聞が報じています。富野村、久南村、長池村、長富村などもいわれたが、結局富野荘村となった訳です。観音堂の字が入っていないのではなくて、富野荘村は、トミノショウ村と読み、トミのミは観音堂の観をみるとよむそのミで、三村名が考慮されているのだという説もあったと史料は伝えています。

昭和二十六年、四カ村が合併して城陽町が発足するとき、新町名について、住民の公募によって決めました。千以上寄せられたうち、城陽、城南、南久世、南宇治が残り、南久世と城陽のうち、最終的に城陽が新町名とされた訳です。久津川は近鉄駅名と小学校名に、富野荘は駅名に残っているだけになりました。